



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

叢書堂雜錄卷之五

浪華

前鐘成曉

晴翁

撰

此書

藏印

○徒然草第百十九段云錄倉の海よかにとく魚ハ彼よりあらざる物
そ此頃りくちの物す夫も錄倉の年寄の申侍りて此魚ありと
若かり一世をひるぐく人々の前へ出ると侍らざりき頭ハ下部もくび切
く捨侍りてりは也と申す。うの物も世の末より上りぬまでも入るを
ゆも侍き。隱解の論ニ云此章堅魚の事とソク古今の變俗となりする
もの全く堅魚の皮とソク堅魚の皮ふりがむちう夫堅魚の諸所よ
有て別く土佐と上品とせり能々考ふる錄倉とソクつづく詞す
見まぶ録倉武士とソク堅魚とソク見づる當時太平記の乱と

武家威勢をすし帝德を犯し給ふと歎きて堅魚より斯ムキ人
萬乗の君とりども世の盛衰のれ難を更にハレ衆人が盛衰歎く
まとの教うりた兼好その世又ひれば繁昌の武家と批議せしむと
第一うる堅魚よとをて己事を得ざる情と述るなり蓋鎌倉の海又堅魚と
シ集ひ彼もひゆきうる物と此頃りとて物をうる鎌倉武士彼
鎌倉の境地よあわく威勢をすし無双りとて今此頃天下の人々も持賞り也
と當時の盛んうるを挙ぐの詞うり夫も鎌倉の年寄の申侍りと人の物語小
字にて兼好も意趣とのづり此集も若く一世半をひき
人の前へ出ると侍がりきとて今繁昌の武士ども已等が若年の時半をひき
をう敷決断して上朝家の前へ猥ふ出るとも侍らがりくとく頭へ下部も

かば切て捨るべし物と申すと頭との相摸入道とて言ふん此入道甚
無道すて放逸無慙のうすひゆき故天下の人々を結び終て天の罰をうけ尊氏
義貞赤松もど俱よ起りて鎌倉兩六波羅を破り頭の入道の命令を聞うる
者多く下部ふ至まで入道の下知と甘く喰がる故罪きんまでて切て捨るべしもの物語
きりとぞかずの者も世の末よりれば上をみても入立とぞと侍れとひ兼好年寄の
物語と受く意と述られて抑相摸入道惡逆日々よ長ド天下の大傷と成る尊氏
義貞是と七一且天下一よ定まんとて時又尊氏の勢強くすりて大塔宮とくら
其外官方を押しあ終よ後醍醐天皇と追奉るこれふ依く新田楠木と支ゆるよ
御運つる御方の兵士あらぐく七帝の御勢をうへさせ給ひ尊氏の勢日々ふ暮
鎌倉へつよ及ばず京師と犯し上をみで入立更に成るべくと此入立とぞ

七葉院堂集錄卷之五

侍より一匁を味ふ時ハ全堅魚の皮を知べ一肉食の事のみ入金と言
とも外よ書様も有べ一入立より匁を武門の帝土に入立く我意とすし天下ふ
令と出一王命り匁を消衰へる皮を數きて文法うり云

此論諸鈔よ見べし実も有べく聞へ珍しき事あふ出せり

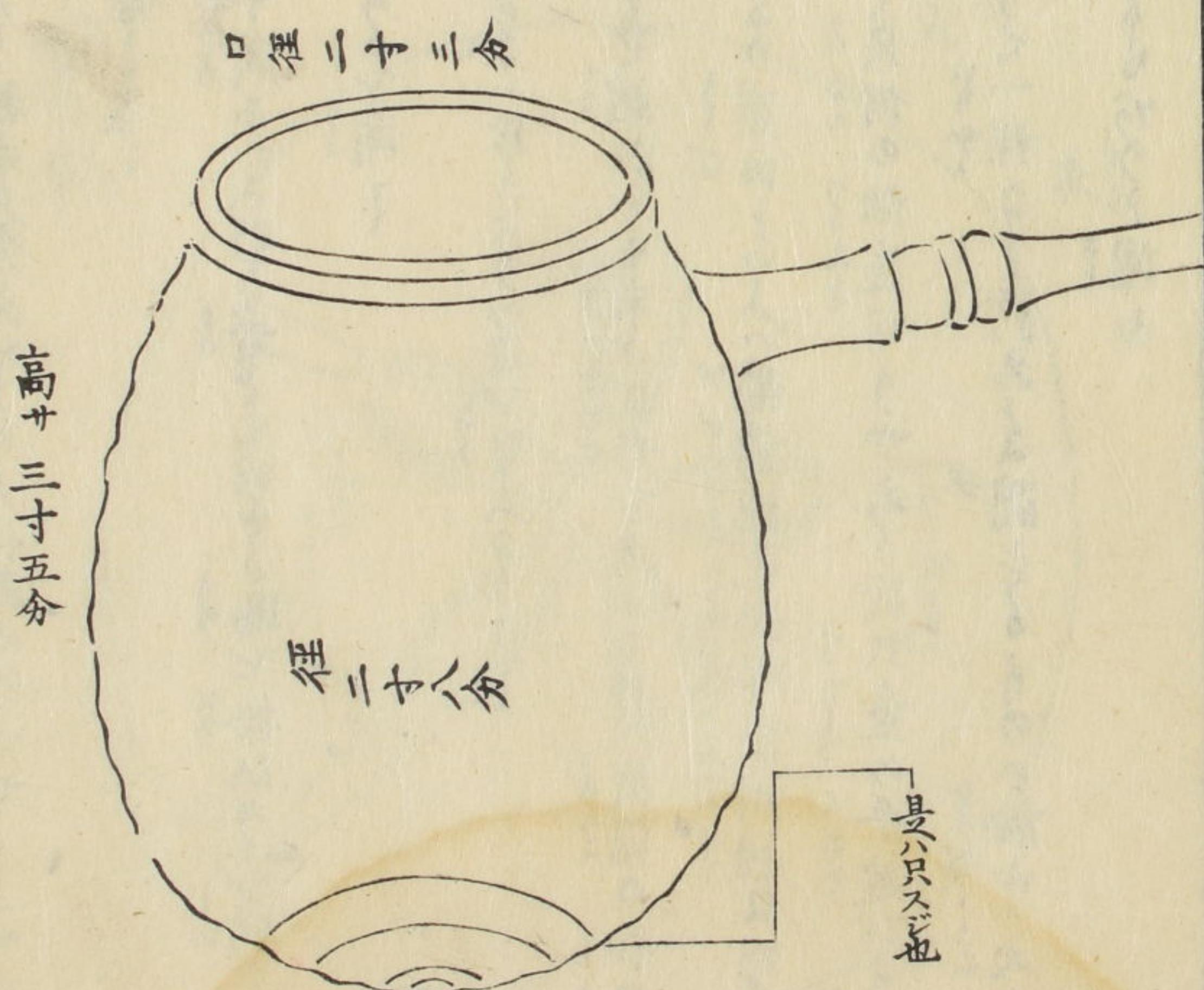
○四佐侍從正則稻葉三宝を信敬おもへ皮淺うに職ふ有の日經説又依く偶思へ
ちく天竺の尼蓮河の蓮實と得て百八の念珠とあへて持とぞやく當時肥足長崎
の執事黒川与兵工正直丹後守此皮と談び正直長寄ふらう蘭人ふ尋求り
あふゆい尼蓮河ハ水深く速よ流きて跋提河よ落蓮ハ河岸り入江の如
き所々生じて花の大さ三尺又過ぐ實も又隨く大さううく念珠と見べき
小う物をぐく有皮も大なるも実熟て乾きて後水上よ落ねば河水甚だ

早くとて暫も畠る皮を故よ人取得る皮希う我輩利買のあは彼國界
ふも往き多ひ知べて手ふ入うべ奉るべと約して後七年と經て日本よ
来る時うづよ一顆の外ハ求り得る皮の難うと述る黒川侯即江府よ持
来つて稻葉侯よ贈る太守昔日の意樂の念珠よ有らばも今大少く而も
一顆うづ以て塗香を入る器とくして腰よ帶とて常ふ離れて政仕閑居
ゆひく後号奉應士命終の期漸近きよ臨て故りく是を寂紫居士吉永よ授与し
ゆく時よ元禄丁丑年よ升庵平日念むる毎よ彼冥福を祈りて口不詠院
の号十聲と称し正徳五年乙未の夏是と至軒中川常辛よ与く曰我殘生餘ゑ
故君の回向を生涯よ限る夏元より期する所ううとゞども願らく猶志をく相
續せん度よ常守受びて日先生ハ其表由りて余也我何と擾うたよ是を受

繼ん哉と再三辞されども宿縁あらんをいふて爰よりぞ又思へ人所
あれどうと其求め切ゆる故又辞とも言ふて是とくに壯嚴を加へ
て家々傳ふ色彩玄妙又似て長さ一寸二分朝夕念佛と湖信院泰應玄如大德と常宇が
一生回向せし上末の謂すりとぞ

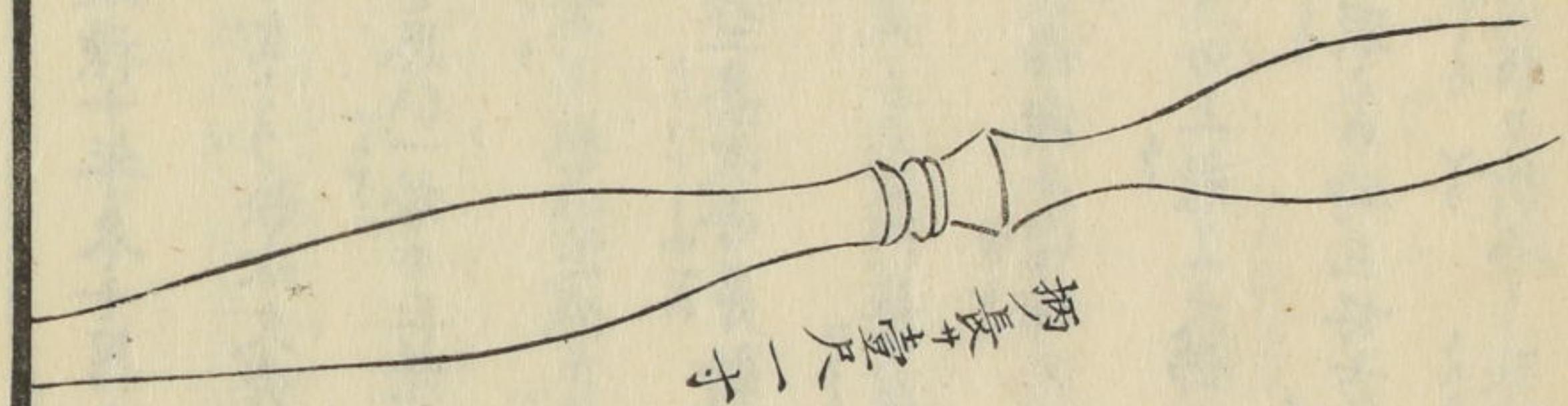
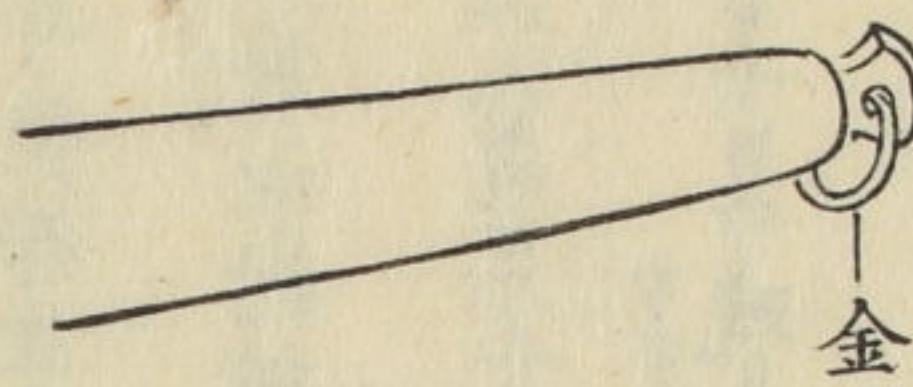
按とく天竺の蓮の大なりと豫て聞及び南都東大寺の什物は俊乘坊重
源所持の蓮の實は柄一枚り其大きさ口徑二寸三分廣さ所徑二寸八分高三寸五分
一枚の頭より上の縁金の金具柄黒檀壹尺壹寸次よ圓あり俊乘坊名重源姓紀氏瀧口左馬允
仁安二年入宋与宋西遇于四明州相伴上天台山翌年秋備宋西歸後爲源空上人之弟子改名
曰重源後白河法皇勅頼朝令東大寺再興於是可爲源空大勸進職也源空固辭ス重勅曰門徒
中宜撰舉器量者因以醍醐俊乘坊應詔而令重源領幹事乃作輸車大可容身車之左貼三
詔書右貼幹疏巡行州縣勅萬民經十餘歲成就焉元久二年六月五日寂或云壽八十六
○永祿十年東大寺大佛殿燒失を松永久秀が所爲かと言傳ふとあるべし

和州諸將軍傳卷三云永祿十年冬十月十日南都東大寺大佛殿燒失せり其
故如何とく同年六月下旬より松永久秀奈良多門の城を築て在住を三好左京太
夫源義迷是と聞安らばと思ひ一族の三老臣三好山城守康重入道笑三同下野守慶久
入道鈎闇日向守長縁並木麾下城及淀城主岩成王税頭慶之細川六郎氏元松山藏人
久清入道新入齋中村新兵工高次舍弟新助高之等五千余人を遣て攻掛
細川六郎松山入道三千余人在右門佐久道が信貴山又在城せしと押へ残る三千余
人南都小通り十日の晩大佛殿小宿陣久秀是と聞夜討よ駒一兵五百余人
を率て多門の城を出で亥の上刻よ大佛殿又夜討して遂よ切勝追崩し鎗中村
兄弟を始め六百余ひと討取その時三好方忙く防ぐ戰ひ小篅火矢を焼捨置
たりが三好方の鉄炮の薬又火移り折ふ一寒風の事ぬれ大殿講堂中門両西門



蓮生於泥而清淨性忌
糞漏油膩物周茂叔之
云菊花之隱逸者也牡丹
花之富貴者也蓮花之君子者也且諸佛喜
以蓮華爲座亦取清淨
之義耳

俊乘上人所持
蓮寶柄杓



回廊ホホシグ火とヨリみナリ松永秀火アケ大仙殿ホ焼セヘ世間小
言説ハアヘ審小考カダヘ云

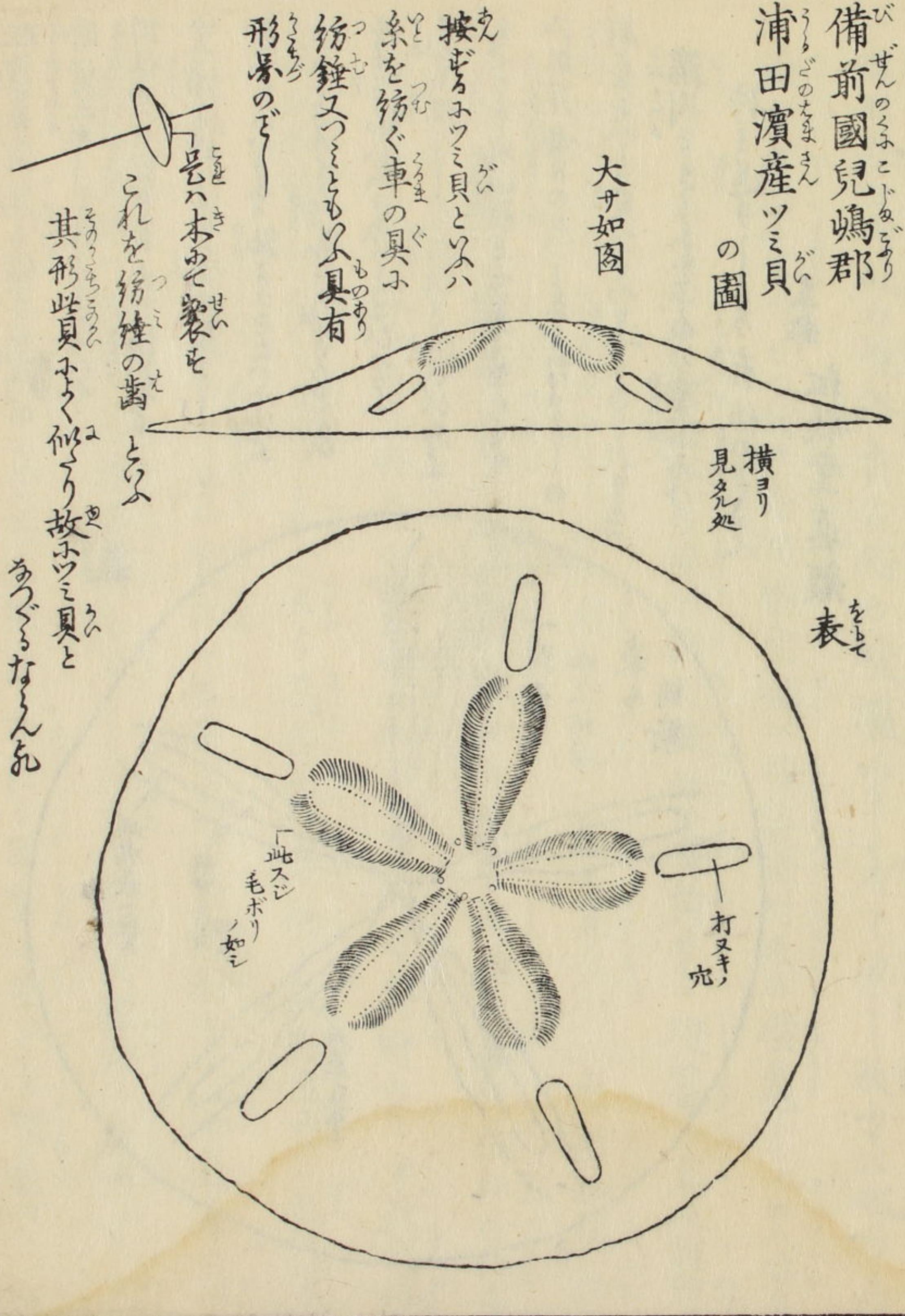
○山家集云淡川のう田と申所ふかく形者どもちゆく物を拾ひタリを問リレバ
つと申りセ拾ムうと申ルクと聞く

さうなたて浦田ヨ移ハ聲の子ハナトヨウツヌヤタヘヨリタマ

一説又此つとソヘル貝ナリモ然れども未だ其形トキアレバ彼國の知己又
此更と言ナレバ送リテテ浦田ヨリハ備前國兒嶋郡淡川村ヨリテ
浦田の濱ヨシ海辺ヨ此つと貝何の能益ナリヤもテ只童の手遊びヨ拾ヒ
アリシムンナハ大小ナリヒ一様ナリバアヨ圖モリヨハ就中大の部
ナリ小ナリハ經一寸許ナリモナリヒと聞由

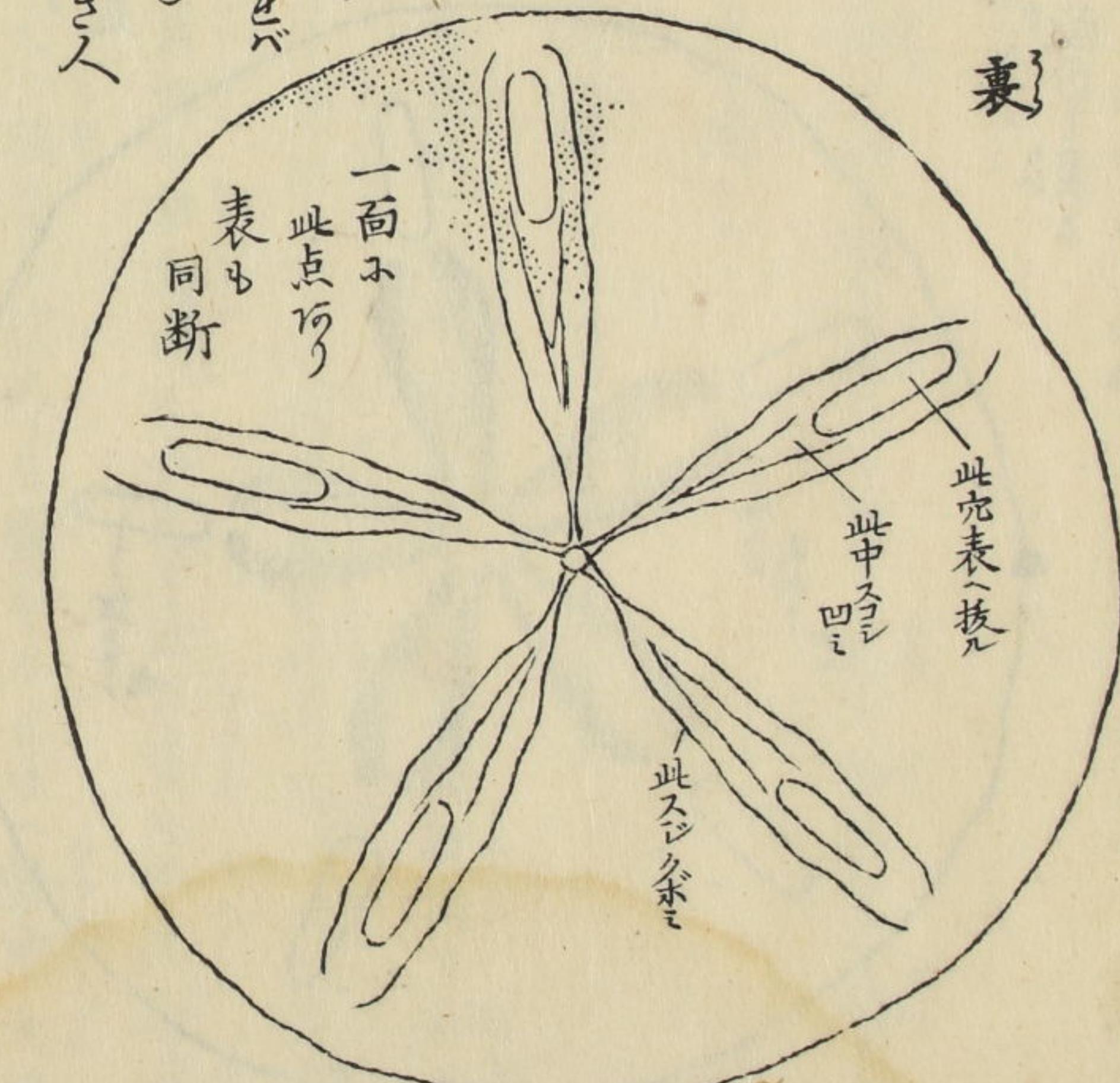
備前國兒嶋郡
浦田濱産ツミ貝
の圖

大サ如圖



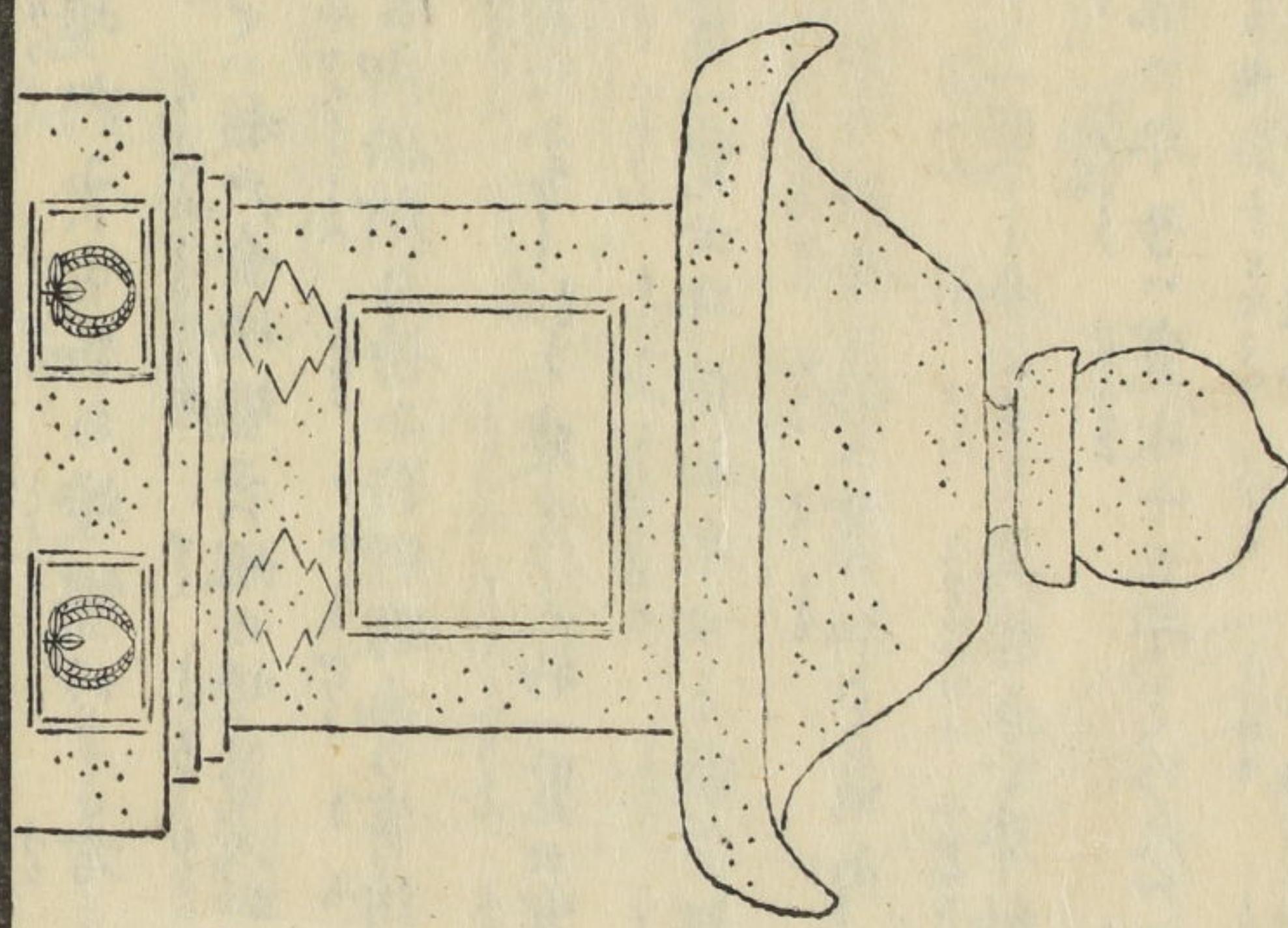
狂歌堂真顔集云僕おの小弓の
游資之曲と物語りのつを
田位上人の山家集みひ流川をと
り浦よほとりの河より
見るにいある物うそとへ小弓ふ
近きよりとゆゑをとほりのひし
けらるやおはみうとひなふ
ゑもひくとひくとひくとひくと
もてひりぬけ狂刀せ集うせんとそ
みが月毎月の日つとあくなるよーの
形をとく見ひうち送りあされをば
流川とさくふをとめの蚕小豆
けみ送りーと吉俊のよき人

東都 狂歌堂真顔



○ 南都春日神社の境内古物の燈籠、右く举く放すに暇、左く
就中石燈籠、右へ鞍戸金燈籠、左へ蟬の燈籠、浅野侯の燈籠、あと世人挙て
見处す。若宮御供所の傍、小狩野探幽の寄附せし、燈籠一基又狩野
尚信の寄附一基、同所下す。びく建す人物一覽云寛永十三年探幽齋住
画所汰服、云書畫一覽云守信初采女と称し、探幽と号し汰印の佐小
叙を孝信の長子なり、丹青の妙へ世の知と傳ひて、狩野の名を海内
の画風此汰印出で一憂し、今又玉く其粉本を準的とし、延宝中は汰印幸
三歳とて、燈籠の年号は寛永十五年とされ、没期より三十五七年も以
前、尚信の初名一信、自適齋と号し、主馬と称し、探幽の弟也と又
妙手の聞高し、慶安二年二十四歳と卒しと同書ふ見へて、燈籠ハ

探幽之燈檠之圖

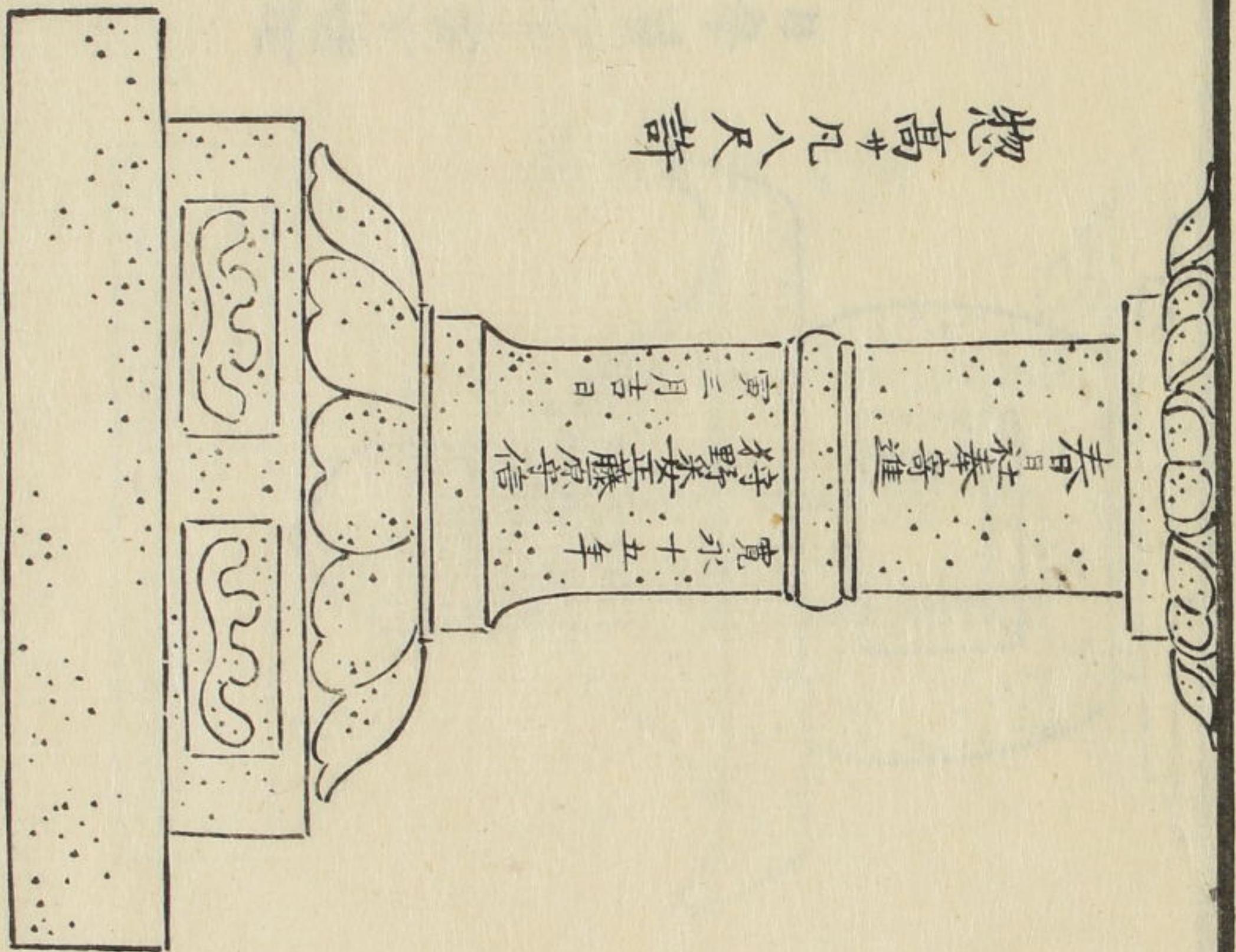


寛永十五年寅三月吉日

銘云
特野采女正藤原守信

惣高凡八尺許

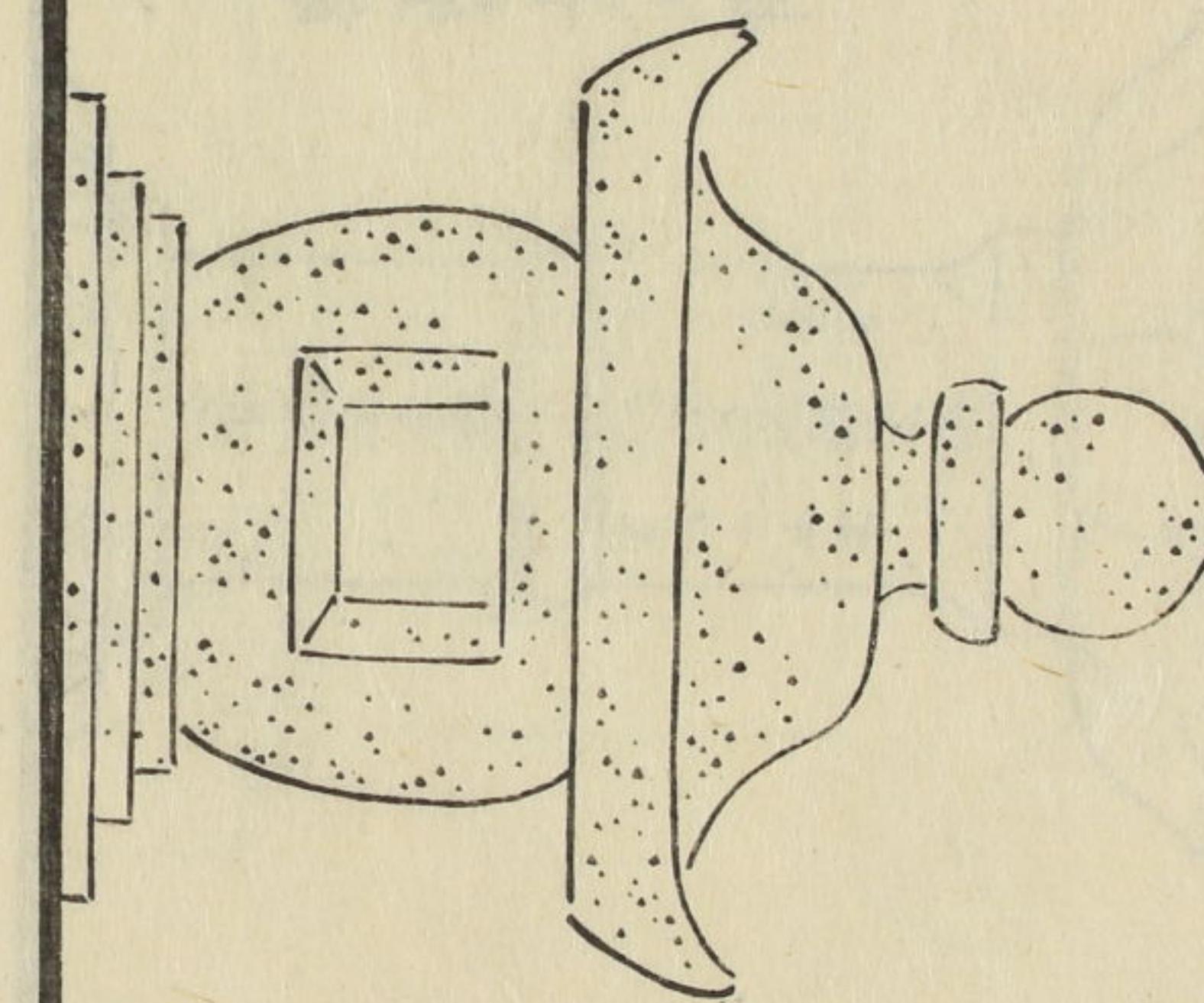
春日社奉寄進
寛永十五年



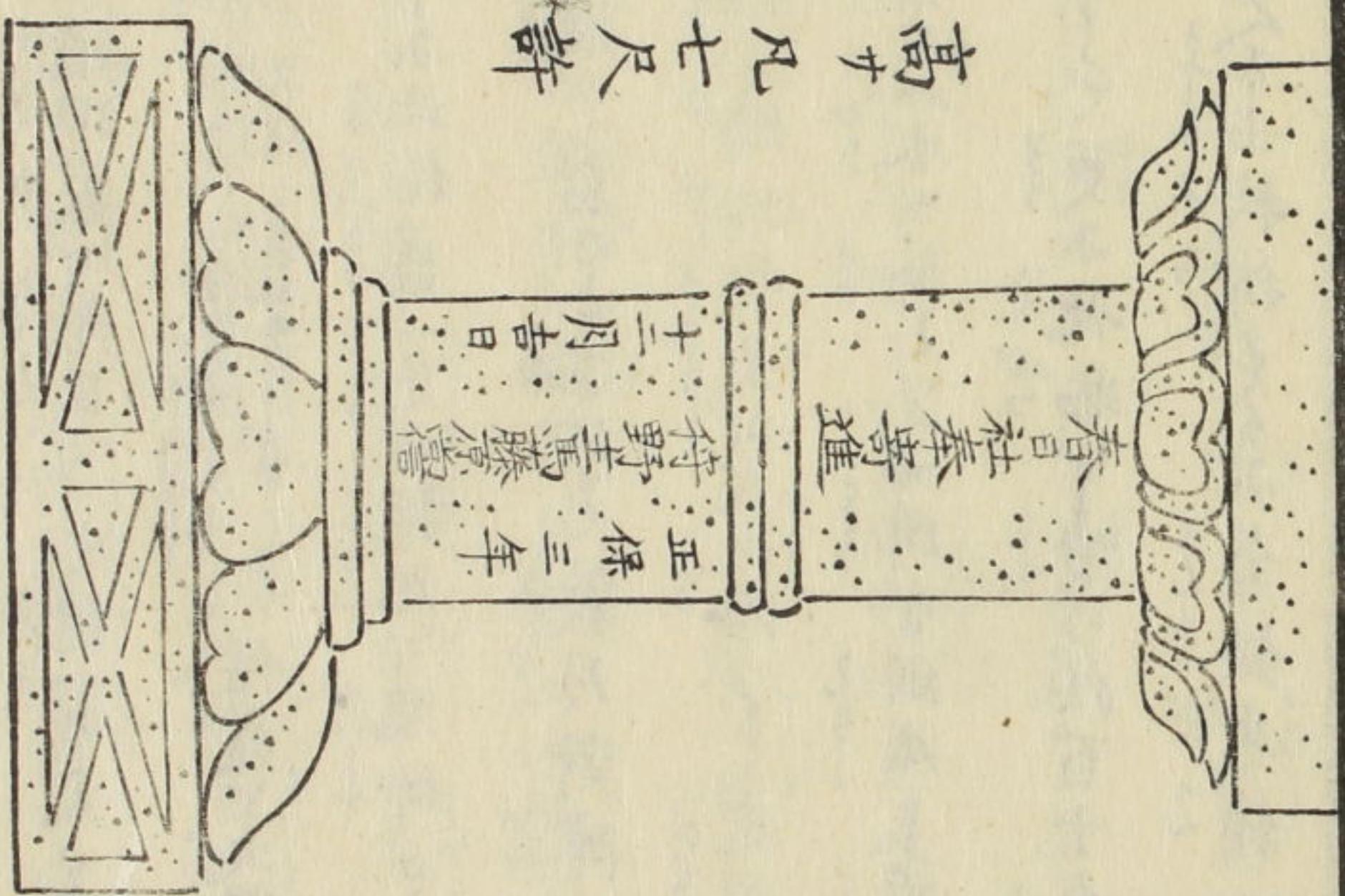
尚信寄附之燈籠之圖

銘云、狩野主馬安藤原尚信有

正保三年十二月吉日



高サ凡
七尺
許



X

正保三年と鑄しられバ死期より衛々四年以前あり兄守信が先つ更又十五七年

嗚呼定ぐる世のやう也正保三年より今年安政四年迄二百余年小及べり

○佐久間右工門尉信盛ハ織田家の老臣にて隨一の人となり大坂本願寺と攻ん

たり天王寺を向城と構へ今か月江寺の池世人尼寺と云ふありとて一子甚九郎とす

三千余騎そ籠置く此信盛一宗の根元を滅却せん更よるに更と思ひが

故ニ無更不城を下渡しゐたと思ひて數月對陣のまゝ茶湯などと飫び

更小合戦せらるゝ程ニ織田信長公大お怒つゝ追放せしる信盛浪人と成る

終不帰及益井の山奥五加木谷とくる所ニ閑居し同伴の老翁四人と共に住居

平生小五加木と食とて更小他物と喰ひ百十余りて壯健ありとて孫ある

佐久間久左門とくる士扶持とく金銀米緒の類ひふらば只朝鮮入

參と調へて送りたりとぞ久左門へ送りたり短冊ふ仙家花より題ふ

あひと慰しやとふひもよぶんの花のまゝあ路 佐喜

又裏書ふ慶長十七年三月十八日とぞ此幽谷とくるハ二丁四方が程ハ五加木ニ

う生繁りて頗る難所と經ざる行はん山分なりとぞ實ふ末世の仙

なり此久左門ハ君公との孝慈を感せられ御あゲ用ひ有一とぞ

○宝曆九年四國路の産むるにと達磨男と号せ者浪華に登りて道頭堀ふ於

觀物とせし大ふ評判高く繁昌せり抑此達磨男と云ふ兩脚ともふ膝頭より下

がちに支離うり然るま種々の藝もありと諸見物者嬉じむ實ふ前代未聞の人物すら程小

遠近ふ聞えく是と見物せざる者多く近來前後ふ雙うり大繁昌すれど延宝

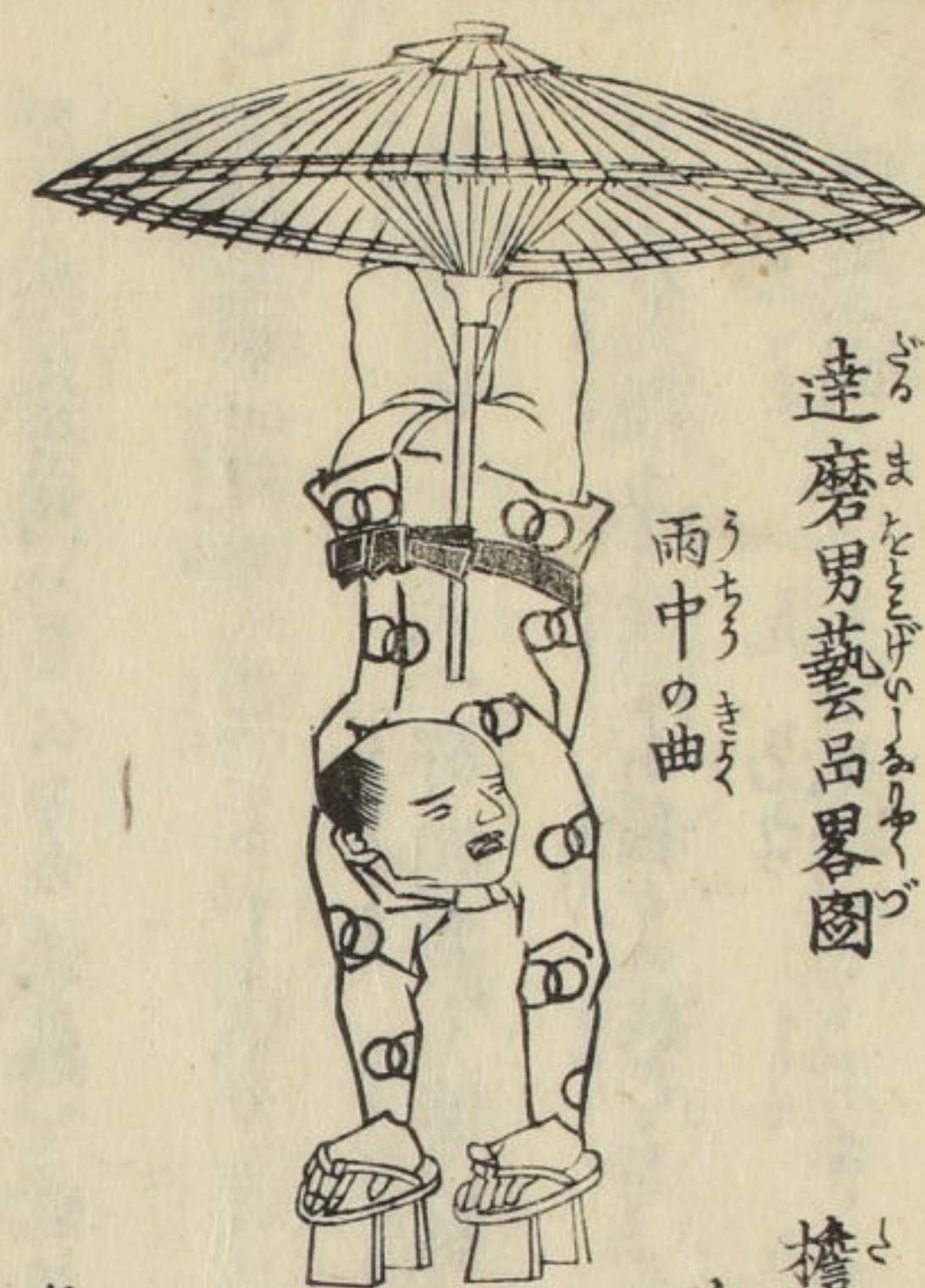
の玉兎ハ手をして足と以手の用と當時の達磨男ハ足まして手と以て足の用と

葛浦川公佐画

あく實一對の奇觀とソノ

達磨男藝品畧圖

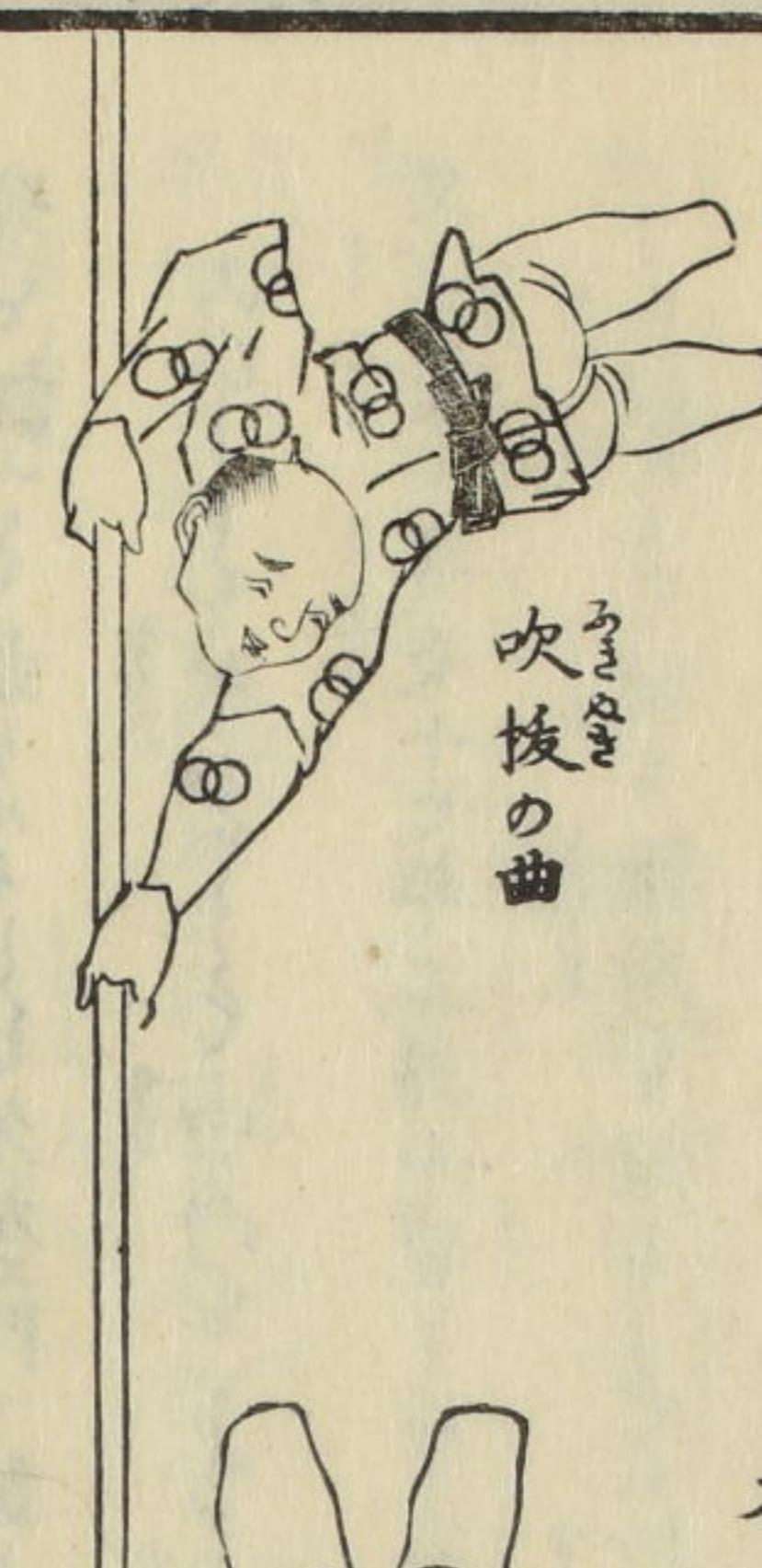
雨中の曲



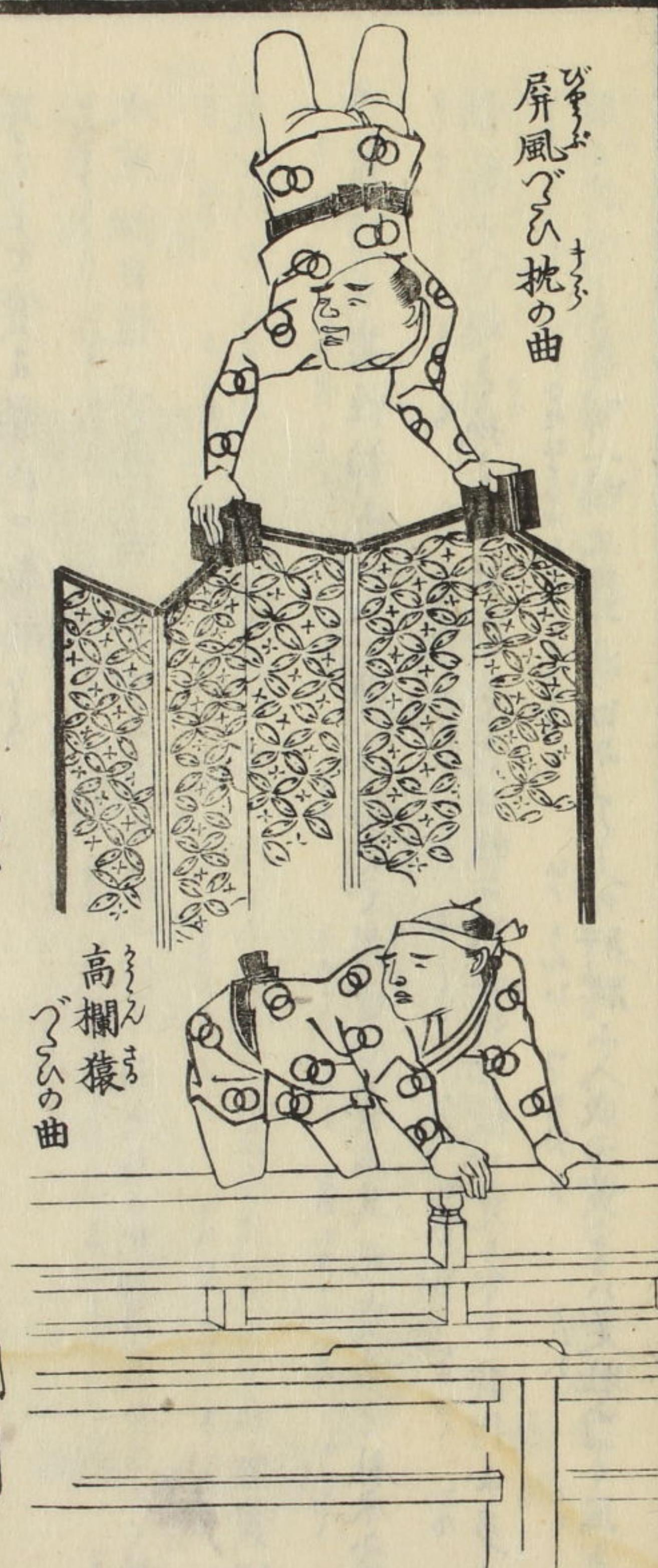
板を立^{タチ}其上^{アゲ}
逆立^{ミタチ}の曲



擔桶^{タケ}水^{ミズ}を入^ス腰^ヒを
荷^フひ手^{ハンド}を歩^ム
天秤^{テン}びけ^イの曲



吹抜^{フキダシ}の曲



屏風^{びやう}づひの曲

鐵拐^{てつ}が峯^{みね}坂落^{さか}ーの曲

尚此余許^{あまこ}きまく^る
曲^{まく}あり畧^{りょう}を



采^う曲^{まく}

○文化六年冬、浪花道頭嶋ふからて猿と觀物。昔より其名と聞ひ、画するを
見とくべし。生物と見し更に人物の見客山をありて流行せり。凡其形狀猿の大
ありの外、面臍毛色は大同小異なり。面色黒く毛色亂色。茶と帶する其頸
在留の蘭人加比丹人名「ヒテレキドワ」の云此猿ハ爪哇國より產するのみ。ヨーロッパ
号くとも實ニ稀代の觀物。

本草綱目援川廣の深山の中産と。猿相似て長大あり。其臂甚長くして能
氣を引く。又多壽。其臂骨を笛ふ作る。甚清亮。其色青白玄黃緋
の數種。其性靜く仁慈。好んで果實を食ふ。其居更多く林木ふる
能數丈を越く。地よ著泄深くて危す。惟ふ附子汁を飲む免る。其行多く
群る。其鳴と善啼。一鳴三聲。淒切く。人の肝脾ふ入或云黄。是牡也。黒きり

是牝也。と按するふ當時の

後ハ面手足とも黒也。故

正しく牝也。あん

猿之圖

俗用猿猴二字
字義之



粗仙寫
縮圖

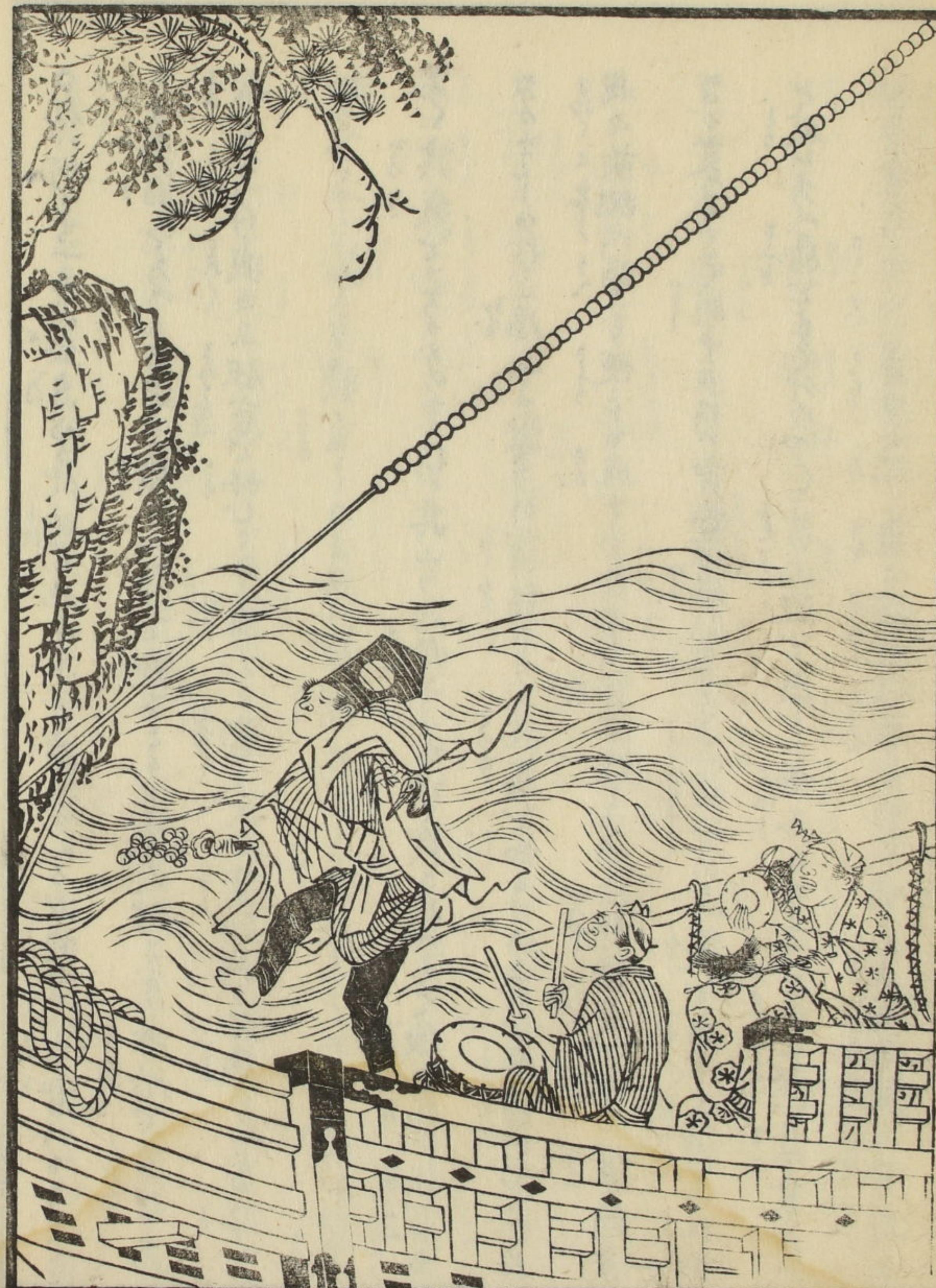
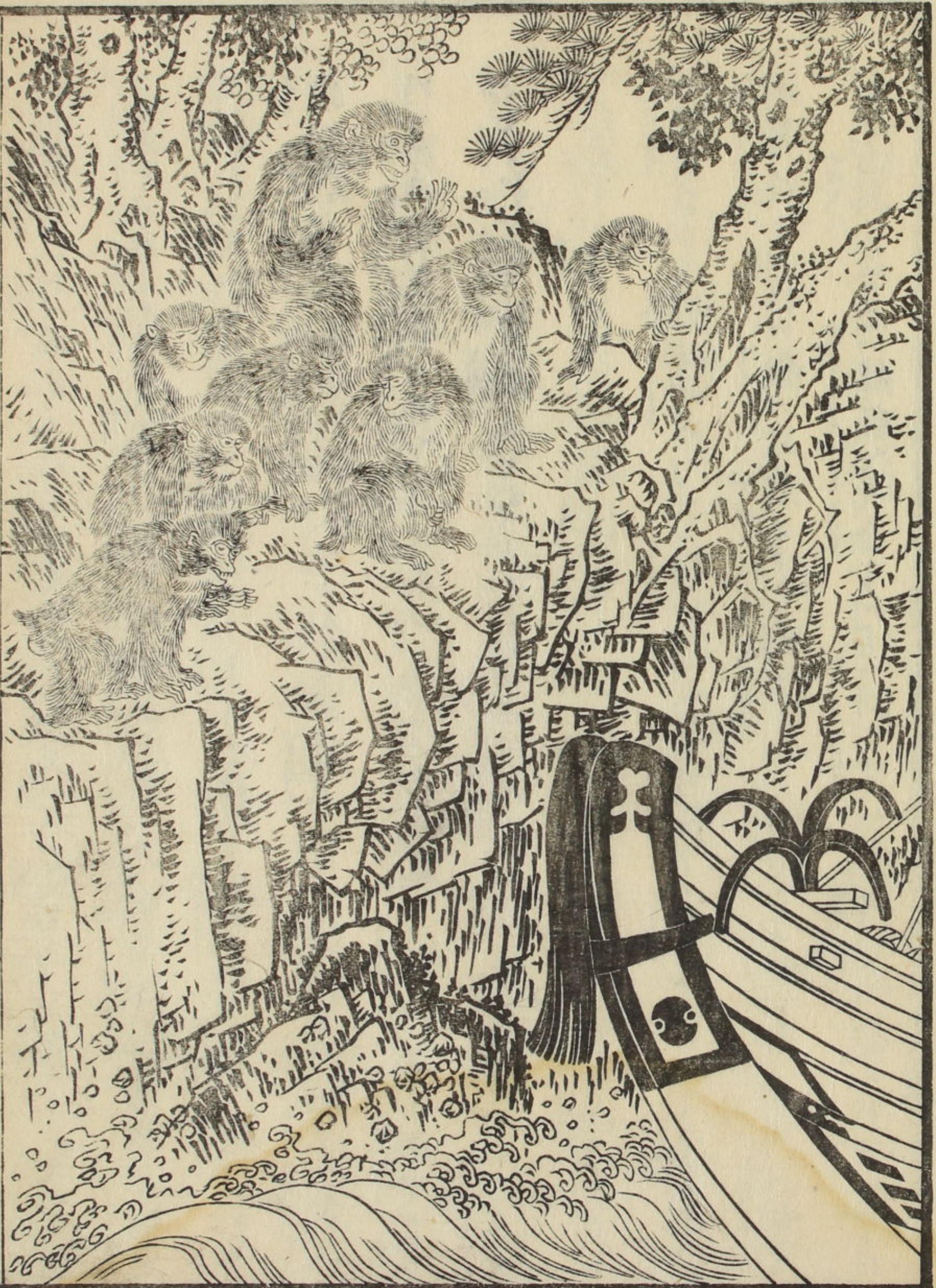
和漢三才圖會按。猿即猿。本朝未有之。自中華來
有畜之。車云然。云舶來。而畜之。夏有。有。一

○浪花の俳優先代竹中綱八自明和至の幕内忠信の喜助と異名とせり囃子
方より旅芝居ふ西國へ下す難船にて衣裳道具と言ふ及ばず一統の衣類を
失ひ怪我を歸りて悦ぶやどめ更に此喜助一人鞍と放さば携へり
故斯の号一とぞ此者度々西國又下す難船ふあひ一は一年長州へ
芝居ふ下る折より澳より丑寅の暴風ふりて一天墨と流せり如く
ふる雲り波濤頭上小踊船の數十丈も上り下りて船中の人恰も米儀と
見ゆる舟右ふて舟左えまろび今や此船海底ふ沈むる
思ふて原未雨の車軸を流りて船頭水主の帆をひき命を乞
エふてきく何方とも漕付んとれ時又一統祈誓とかけ神仏の加
護るや少く風や波をやうよううち松風の音もよしと聞へられハ船頭

是と考へ是ハ島山ふ近づくと風の音と約と遙りみゆ櫓を
腕も折と漕わゆふ吹簫くふ諸木の葉音近づく皆々是を力を得て島山の
くと尋ねうち風大おゆく浪も行ふてて闇夜の空も見うちふ晴る
日の光をかむる船中一統蘿生のうち何せ譬へんやま時ふ近づく山を見
是が何國ともかく島山そ更ふ人家の有とも見ゆべれども命助じてひく
神仙の加護うと悦びつ船ふ入る溢と出船の破損と修理をうち鳴
山の松の枝と猿一足顔と出一此船と見つけ驚くや忽ち枝をつゝみて奥
山へゆ行ゆる暫くもるうち追々ふ數多の猿出来り次第くか群ぐ
其數りびとをぐらん猿は俄邊ふゆび木の枝ふ上りて船中と指さくキヤウ
くとあまく啼立たゞ又暫く有ゆくまで山奥へゆく皆々是と見ゆ

何事やらんと不審なりへ處よ又數多の猿出来りと見ふ今度へ人すゝも
少々大きく覺ゆる猿の毛はそろ班よとそ口へ牙長く生出つるゝ老猿と思ひ
と十四五足の猿手並うて連来り松又以前のゞく殘りこゝ列び此度へ声と
立々辭義とゞる形勢みて彼大猿をり拜みて又辭義とぞと數回
タゞ皆々大おあやし言語通せざれど其趣意づくべ一人の云彼親猿と教る
体へ全く食物と乞ものあしん乎然れども斯る邊土ふ漂ひ幾日と煙る人里不
出んやもう難ふ小聊りも食物と減さんと思ひもすと船中評議區々
あらう向かと見ふ栗柿ゆうり果樹りうそそぐく實生されば食と乞ふ者多く
きとさく浮漂タゞ先試み小握飯と投て遣はれて直よ握飯とあらへ
二箇三箇タゞ遣され是と取て岩の上ふ置く又りとの如く物すむ形勢

されば何とも一毫も合点ゆべ時よ此中ふ吉藏とる衣裝元々智りりのうり
しが不圖あらうとさう猿ハ人の心と能するゆゑ何う處此船と芝居乃
まと見つけ我々又狂言と好ひるや有んと皆々大々笑ひ何とく猿のあらる事を
知るべとひよ吉藏重くまよび斯のゞく道具あぢりと見つけ且
さく其氣とこりりのちれが其ソリれ無りもだれにされどそ猿の爲小狂言も
あるまじタれど思ひよかうの畜類へく其恩と知りりのうれど所望とがりへ
我々故郷へ帰る便とも成すとさとも言ひじとくよ一統横手とおで實りも
るゝ更すうとそ同ドクねば吉藏の思ひ廿と三番叟の衣裝と出一鳥帽子鈴あ
と取そろへ扇とりぐだりゆく笛太鼓と出一難子ふかるよ互々顔と見食是
のうすう更す前へ己ニ海中ふ況く魚の腹中に葬られんとせー身の不圖も命助り



今又猿の為ふ打手うちしゅをうなご可笑わらとくべ又一人は是れを命いのちを助すすりまつ悦えきびの舞まい
そあそられとありく思おもひだ笑わらて催さな興おき小乘こよ難むず立たつれば吉藏よしざうハ三番叟さんばんしゆ
とむすと只ただらんとくと鳥とりとびすとびす鳩くにのまねまねす拍子ひじふやうて舞まいされぞ
猿さるは是はと見み大猿おほさると向むかへ又々かき出岩上いわのうへのせめせめの声こゑと立て歎うつらうさんぶ
うつらうさんうつらうさん彼老猿かれさるも手てと上あがくあぐあぐとあくあくとあくあく如ごとく悦えきぶとくとく舟中ふねぢゆうの者もの
どもあればこそと離子りしとあくあくあきあき水主船頭みずしりふなも浮うき出だく鉢はちをさし舟板ふねいた
とたきく合あつまれば吉藏よしざうハ益浮ますうきき鈴鈴と扇おうぎと歩捨あきく花笠はなばしと両手りょうしありち
三番叟さんばんしゆの鐘かね岬岬暖ぬくとかくかく可笑わらは是はよりせく離り立たつ
漸舞終すむりなれば猿さるハ以前まへのゞく頭かしらと下したと辞さよをく如ごとくああ又彼大猿かれさるを
かたく山奥さんおくへそりぬ一統いつとう顔おほと見合あつはと一同ひとうと同ひとう笑わらひひ汙けなと拭ぬぐひなひぞ可笑わら

かろ處ところよ又むくと猿さる出来できりやく何なに手てく携たぐへ來きり岩いわの上うへ又搔か上あり
て舟ふねの艦かんを見みて走はしくと礼れいを如ごとく又山さんふ入いりをくく是はと見み則そ
章魚あわじを何なに用もちるく乾かすりのうう曾そと聞き及ぶ猿さる海かい辺へんを蛸たこ
木きの枝枝ああとふくくて乾か食物しょくぶつととるよう符ふ合あつせせ正ま是はと礼れい持も來き
あんと其志そのしと感賞かんしゃ思おもひ落瑛らく一畠類いのし吉藏よしざうが無法むはの三番叟さんばんしゆの價ひ
と許多多くの子章魚あわじと惠めぐら夫おとこよ引ひき浪華なほひと無錢むせんの多多く支さへと又笑わらて催さな
しる時ときよ又毫足ひあしきの猿さる出来できりく今度こんど高たかる松まつの枝枝又上あがり遠方とほととりゆ
と教おしゆゆくく集しゆ知しのとよ點頭てんしゅつ夫おとこ東ひがしと取とくあう見みば則そ東ひがしの方がた
形勢けいせいいはく是はは漢かん行ゆ方がたと教おしゆゆくくと磁石じせきと取とくあう見みば則そ東ひがしの方がた
西風せいふう吹ふ出だく三日さんじつよよ山さんと見みつけふ後ご長門國ながとくにふ署しょするとぞ

X

○三好正慶尼俗號木津屋雪 蒹葭堂主人の死を悼み贈る文也自筆寫

浪花よやひアは人藍薩翁と生焉
拂方行歌歌歌歌歌の音歌歌歌歌歌
たる生歌乃、山歌の音歌歌歌歌歌
事よ可思議の音歌歌歌歌歌歌歌
わくらあすだ紫く、紫姥なまく、お東行よ
をあくらえく、すきよもむきさだく、て
すすもいとぬむこくよあすよあすよあす

トモア歌歌歌歌歌歌歌歌歌歌歌歌歌歌
あるひかうかうかうかうかうかうか
方の娘きよ初うりて安なりみすきよちね
こううみの音歌歌歌歌歌歌歌歌歌歌歌歌
あれ娘みくせりをいとあらまくせりせりをうの
本村氏一娘とあせりとあらまくせりせりをうの
告知せりとわへる祖母にまくせりせりをうの
あらまくせりと娘のむるすれはせりせりをうの

孫娘のあどりとひなたる我ども
後の老の事とも輕ひ居よ等言せむ
享和二年七月の中宮は御始の事がちある
とてぬつまよへよりふ御よ御とおありゆ
お内とをぐく御つりをすら經うてさる
うのゆ育ていひ去らくお常はくといとま
やうよのうとやへ名はれども本とくゆと
其は後とはひてうるまきの城廻りを

京國すともんくうけくよきりくとひやく
事あんちく成ともとあ乗あみ四月廿五日と
ひよぬくわがくとも實目くわ枝と先と
とくよく(此の事あんと申えよ)うく
悔の後悔(此の事あんとほのなかよ
有(セア)也れかの末遠く
なれてぬくとやくよ

可タマりひあくとれりうす
乃ナ事トを歌ウルの悔ミす者ヒトも教シ
多タマきうまの徳ハシモトより更カタマリくよす
とト芦シロのあアツクるをよのの城シテの山ヤマの處シテ
候マサニ候マサニを思マサニかうりと申マサニけ
たタよタ人ヒトもううのひヒに徳ハシモトえ
折ハサウエた行ハシモト仰ハシモトゆあくす

二好氏老齋
正義

按二正慶ハ文化三年ニ没行年七十八矣然
當享和二年ハ七十四オノ時也

○相撲の関取タチ、谷風梶之助ハ古今無双の力者アツシトハ世人普く知る所
ナシ言ふよ及シテ和歌の心ハコトグハコトヌト有リ手ハも拙クダラシクダラ是ホの変
人ヒトもタマざタマな處シテ或人の藏シタ真跡マジシテ乞得マジシテ写シタ次タマ出シタ
生タマ年タマハ寛延カントウ三年トて寛政カントウ七年乙卯タマ正月九日流行リヨウの風邪フウヤウ小染コシミ病死ヒヤウ
と行年四十六ト法號ハガク釋姓谷響タマ了風

兵比之御子不無而亦承
吉慶之日月也承和之日
也之實也私方之仰工方
孔也之也之也之也之也
知自天法也之也之也之
以出臣因仰核如中

至高政克至高也以之也
也以之也之也之也之也
也之也之也之也之也之
也之也之也之也之也之

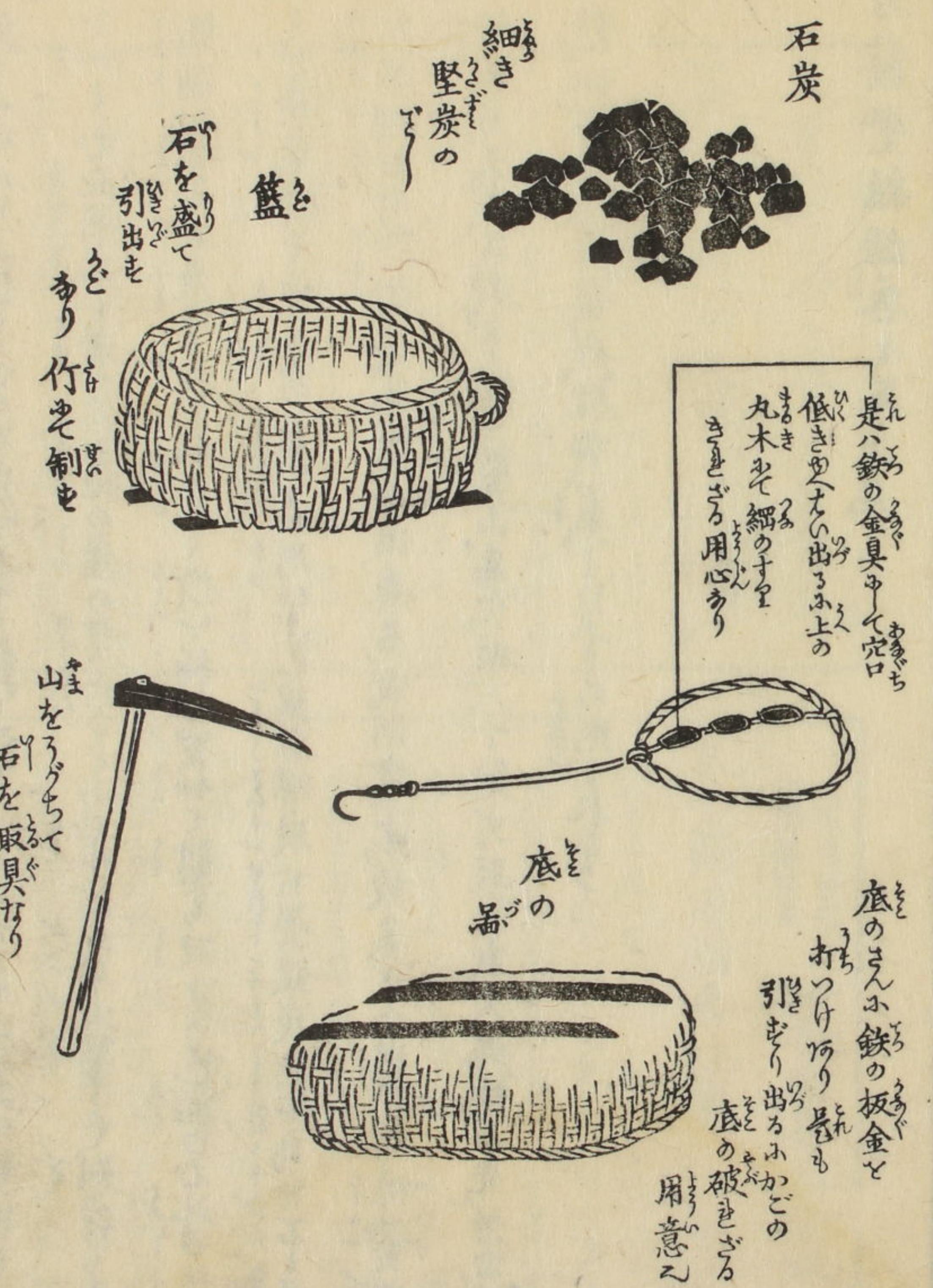
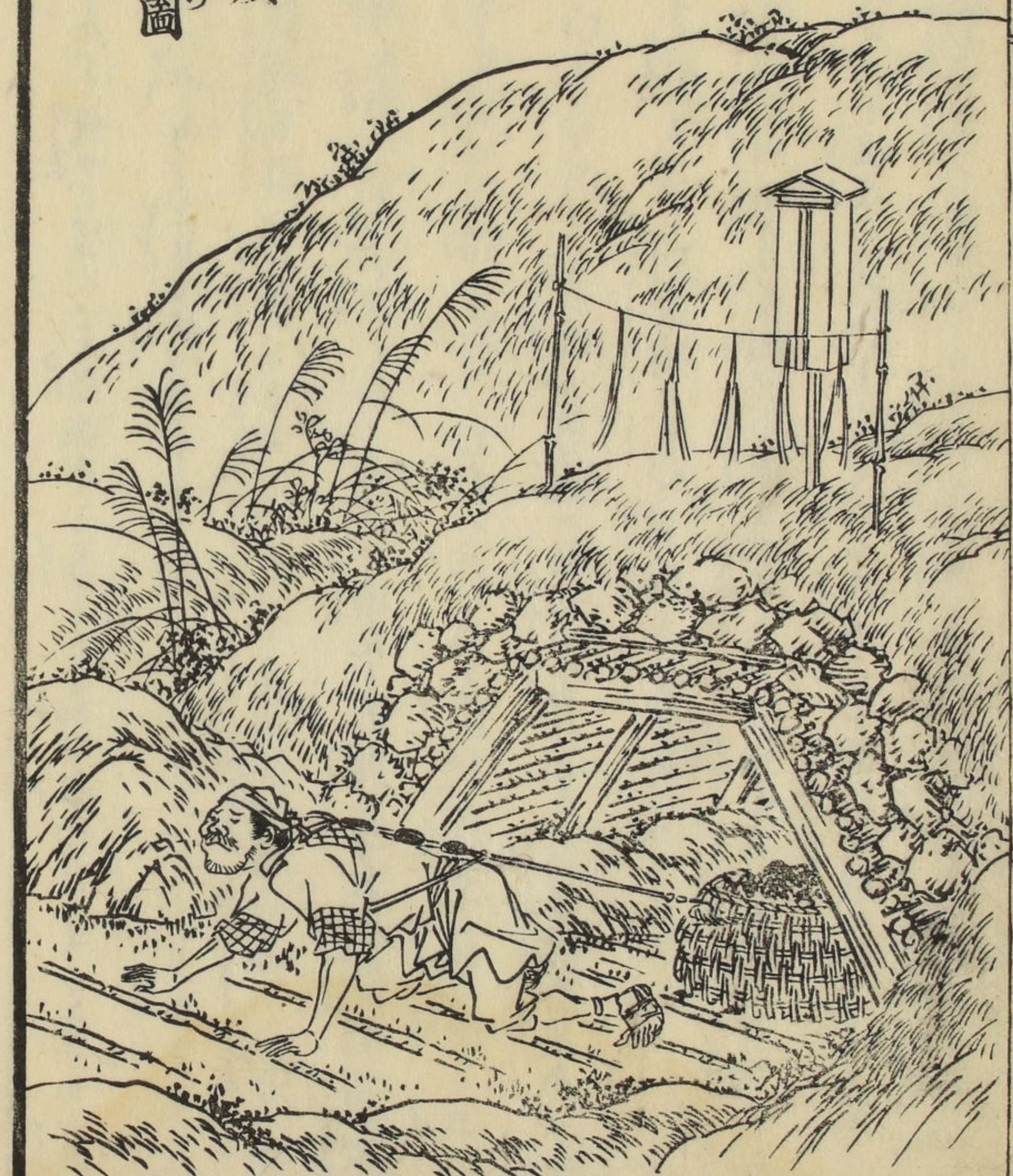
貴也

也

○信房松本の城より武田信玄の居城ゆく深瀬の城と号せし所ありとぞ當時例年正月廿日塩市より大汰會り生土宮村大明神の社司當日市神或ひ塩市と号し城下の市中より社禮とかゞて神吏と執行よ遠近よりこれより大明神云と号し城下の市中より社禮とかゞて神吏と執行よ遠近よりこれより郡參しと賑ひる史觀物放下師あと夥く有り隣國より無雙紋日うる然るみ亦城下の富家にて塩を些づ紙より奉詣の多勢より施しりりく是と受得く家土産より或ひ神棚より供ふ此更往昔より有く其初より最久よりを里人傳へ云往昔戰國の折より敵方よりして當國へ塩運送の道を塞ぎ國兵と苦戦んむる程より自ら塩乏し漸よ盡し國兵志より氣力と失ひ幾難儀え及び然る隣國の好を以て後長尾謙信より塩と運送を國兵これより力を得て戰ひよ敗せば頗る勝利を得たりとぞその

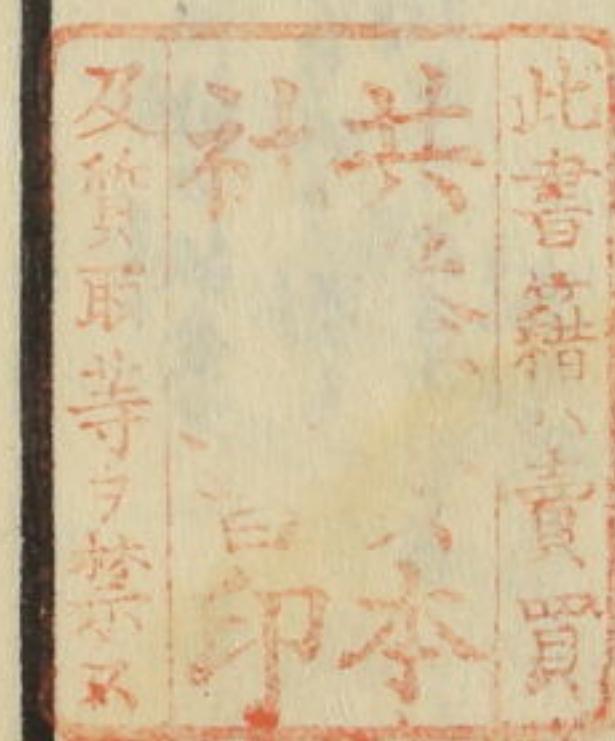
吉例より後世よりても尚塩市と号し是と祝ふりの々と聞ゆ實鹽の五味の中より一日も缺べざるゝのをり近代正説碎玉説云北条と今川と相計て遠州武州の塩商人を留め甲斐信濃より鹽を入ぞ此を以て信玄の兵を困らし謙信これを聞て領國の駅路より鹽を甲信に運びし我ハ兵を以て戰ひと決せん鹽を以て兵を窮せしひとせと言送りきられ信玄を憂らざり是謙信の義也且勇うり斯うり云と則此時の吏と言傳ふるうの如く石炭は中國九州より多出せり俗よ五平太と云按よ其初五平太より者之の塘出せりのうる平塩濱の薪より出來て用ひ其石炭を取て金銀を掘出する同く山を鑿穴と爲し左右上木より曲く漸よ鑿入ゆく數十丈取得く外ふ

石炭
堀の圖



出る小穴の口上低き又石炭を入る藍を引く四道かうりて出る其形勢圖也
如一む此掘出者其土地の產の農民をどろの非ば五平太鑿を別ふらうて
諸國と廻り石炭の山を鑑定て價を極め買切て鑿ち取吏のは聞ゆる此石燒
と真氣りて家吏の日用に用ひば異名煤炭石墨鐵炭焦石烏金石と号
本草綱目云所謂南北諸山出處多古則書字故名之今以代薪炊爨媒
鍊鐵石大爲民利土人皆鑿山爲穴横八十餘丈取之有大塊如石光者有疎
散如炭末者俱作硫黃氣となりてすの則これ

薦良堂雜錄卷之五 大尾



書林前川文榮堂藏書目

岡本一地子著

醫療日用指南大成

小本全一冊

此書ハ医道の便と詳述し、脳科を主とする見
かず又ハ五臓六腑の病と解説する事より解き
此よゆる病氣とも、その療法の仕方並に也
記載する事多く、その要領は甚だ簡潔小
く、且つ實用的である。万病癒治のあらざること
止矣。かくの小冊子一冊で、かまはずなり。

眼科醫療手引艸

全一冊

眼病一切療法の仕方甚多く又ハ傷業乃至洗洗
手等の手引書もよくあるが、最も要く紀を
此書ハ五臓六腑の病と解説する事より解き
多いため、療法の仕方又ハ病の仕方も必ず肺のそれ
であるが、年々これほど多くなる。

小兒醫療手引艸

全三冊

此書ハ五臓六腑の病と解説する事より解き
多いため、療法の仕方又ハ病の仕方も必ず肺のそれ
であるが、年々これほど多くなる。

太平節用福壽往來

全一冊

大阪博勞町
心齋摘要角

伊丹屋善兵衛版

此書上附小字引手にて本文下に
あれば下段上に用文章六百餘通と考
或ハ法文の書方本と云ふ筆を遺せり
おほくへもいふ事無く、文讀小字にて
あとは細くする上段読み引手にて引け
つる事はまづ多くある。遂に本と云ふ事
人間日用を主とする極めて精緻な本であ
たる大冊子用紙もあつた。

和漢年曆圖鑑大成

折本兩面摺
全一帖

和漢年代記是日本の國主都主付中義一
統の春秋秋列國の事も得年代記と年曆將
年曆和漢軍書目錄あつて、て要細工
化し史類を引合して小字便利あり其外
の色紙の種類の種類は多くて要縦等と

妙藥博物筌

全七冊

此書は諸家秘方社妙藥本草方集、丸、散、敷薬膏等あらかじめ方代りまくあり、是乃る書より病名などは多くに見入、少くも一つの病を述べて療法の歩みを示す。

妙うふくゆゆくよ。

長命衛生論

全三冊

人々が年年初より老後まで生きて吉生仕仕事に従事して長命とぞ思ひ得る妻くれやんば生とく生せば生質もくらへんとも生涯無病息天る。

紫文製錦

全八冊

此書は文書とあるとあると源氏あひの中から出でて、御代とび出で、四季を寫す難波數多くする書にて和歌と東山道の歌とくわく歌とくわくの雅をう。

消息明衡往来

全一冊

此書は氣系明衡の消息小字ア世人ニ言ひ、人をもつての圓教主方語一例をうけて筆道機物は人書きすとて其へべらきを之

巻畫早手本

全三冊

人々が人物とおもてよく書かれて居る。

諸職繪手本

全一冊

新板元三大師御闡抄大成 小本
増補
本師の御國ノハ經代とて、ハ是経著アリトモの
福徳と御心の如じむりの人の能をうかすには
書ひたる。長良判ひと妻へ記と實ひと云ふ。

蓑葭堂雜錄二編 近刺

安政六年己未

江戸芝神明前岡田屋嘉

七

仲夏市齋

同日本橋二丁目須原屋茂兵衛

七

發行

同通二丁目山城屋佐兵衛

七

大坂難波橋筋今橋

堺

屋彦三郎

七

同三休橋八幡筋楚

藤

屋宗兵衛

七

同心永橋南木町北入

河内

屋平

七

同心永橋南久寧町北入

伊丹

屋善兵衛

七

京都東堀川三条下ル町

越後屋

治兵衛

七

書林

